

中世曹洞宗における代語文献の研究

安 藤 嘉 則

一、はじめに

中世室町期の曹洞宗は法統の点からも、そして寺統の点からいっても、めざましい発展・興隆の時代であった。中央では臨済禅が天皇や將軍の権力の庇護の下に興隆し、五山・十刹・諸山といったヒエラルキーをもつて地方にも展開していったのは周知の如くであるが、洞門もその教線を拡大するにあたり、各地域においてその有力武士階級等の経済力を背景にして寺院を創建し、また荒廃した他宗寺院を復興・転宗するなど、精力的に教化活動を行っている。就中峨山派の法灯拡大は特筆されるであろう。こうした中世洞門僧の活動により、江戸期の曹洞宗寺院は一万六千を越える寺院数に達しており（「延享本末調」による）、思うにこれは中世の禅僧たちの勇躍たる宗教活動の成果に他ならない。

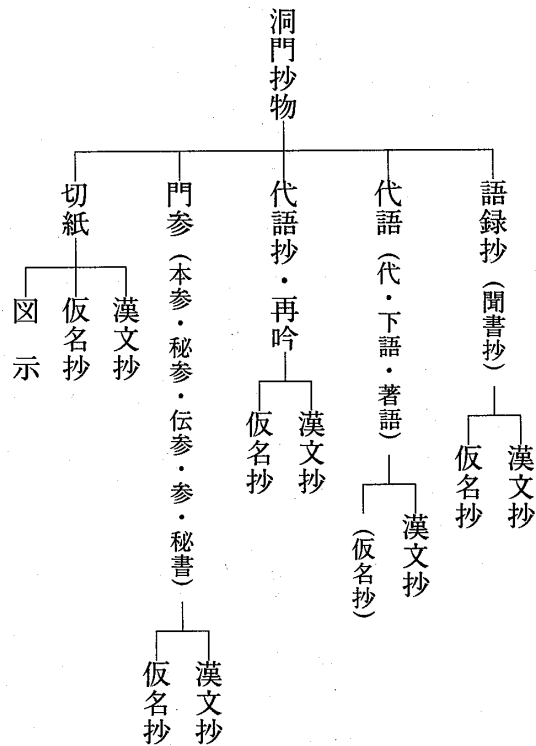
ところでこうした中世洞門僧がその参学や門弟接化、または在家教化のために示した文献が数多く残されているが、これまでこうした典

籍はその多くが公案禅的な性格を有している。こうした文献の研究は江戸期以後の宗旨参究の伝統の中においては、ほとんど顧みられなかった分野であり、むしろこうした公案禅に傾いた宗旨を否定する方向において進んできたといえるであろう。しかし国語学の分野において、東国語方言研究の一環としてこれらの典籍が注目されるようになり、金田弘氏をはじめとする「洞門抄物」研究^{〔1〕}によって大きな進展がなされるようになると、中世曹洞宗史研究においても多くの成果が発表されてきている。

ただ洞門抄物文献は膨大で多種多様であり、いまだに未発掘の文献も多く、その研究も途上にあるといっても過言ではない。近年石川力山氏はこうした洞門抄物について、表1のような分類を提起して整理を試みておられる^{〔2〕}。

これによって中世洞門の膨大な資料の大枠が整理されていると思われるが、このうち洞門抄物として特徴的であるのが「代語」という一群の文献である。これは古則に対する師家の見解を代語という形式で

【表1】



示したものを収録した典籍（代語集）であるが、この代語集なる文献が、中世後期において一定の形式をもつ洞門僧の語録として盛んに撰述されており、さらに近世初頭に至っては十点を超える代語集が京都にて出版されるようになっていく。そして特にこれら刊本代語集の撰述者は、ほぼ総寧寺と大中寺の和尚たちに限定され、大中寺六世の竜州（二四八〇—一五五〇）や総寧寺十三世の巨海（？—一五九九）あたりまで遡って次々と刊行されており、近世初頭において確立した関三利の権威高揚といった目的を伺い知ることが出来るであろう。

本稿ではこうした代語集の成立を考察するにあたって、まず禅門における代語なる宗旨表詮の形態について、中国禅林におけるその起源、そしてその後の語録史におけるその位置づけについて検討し、次に中世から近世の洞門において成立した典籍（特に語録抄や代語集）における代語の意味と位置づけについて検討していきたい。

二、中国禅林における代語の起源とその歴史について

禅門における代語については、已に近世江戸期の学僧たちによって考察されているが、まず臨済宗の無着道忠は『禅林象器箋』「第十一垂説門」において、「代語」の項目を立てて、次のように述べている。

忠曰。代語有二種。一代現前衆。謂師家垂語。合衆。不語。不契。則自下語代衆。此是代語。可通別語名。雲門録多代語。蓋宗門代別。雲門爲始焉。二代古人。謂舉古則而他古人無語處。我代他下語。（四四九頁）

このように無着は代語に二種類を挙げ、「一」垂語し、大衆に代わって下語する場合（以下「代語A」と略）、「二」古則を挙げ、他の古人に代わって下語する場合（以下「代語B」と略）との二つに区別している。このような規定は『禅学大辞典』の「代語」の項に、「①師家自ら学人に代って下す語、②古則公案を挙げて、古人に代って自ら下す語、③禅宗語録の一形式（用例略）」と説明される中の、①と②に相当するものである。

尚、無着は前者の代語の説明の中で、「可通別語名」と述べているが、別語については、無着は「別語」の項目も立てて次のように解

説している。

舉^ス古^シ則^ニ中^ニ。雖^モ他^ト古人^ノ有^レ語。我復^ニ別^ニ下^ニ轉^ス語。謂^フ之^ヲ別^ニ語^ト見^レ於^ニ諸^ノ錄。與^ニ代^ニ語^ト不^レ同。(四五〇頁)

すなわち古則に対する古人の語を前提し、これに別して自己の見解を示すのを別語である、と無著は述べており、別語と代語とを不同のものとしている。従つて先に無着のいった「可^シ通^ス別語名」とは、如何なることを意味しているか、問題となるところである。

なお代語と別語については、松ヶ岡文庫所蔵『虚堂録抄』において、「代別」の注解とにおいて、「代語無語処代テ添語也、別語有^レ語私ハ不^レ然^ニ別^ノ云也」(岩波書店の影写本 五六九頁)といった理解が見られ、これは無着道忠に基本的に一致する理解であると思われる。

ところでここで無着は代語の起源について、「雲門録に代語多し。宗門の代別は雲門を始と為す」と述べている。管見による限り中国禪宗史上、代語を多く用いてその宗旨を宣揚した古徳は、確かに唐末五代の雲門文偃(八六四-九四九)を以て先驅とするのであり、その意味ではこの無着の指摘は妥当であるかもしれない。『雲門録』では巻中と巻下に、次のような三つのタイプの代語集が編集されている。すなわち「一」古則を挙し、代語する用例、(巻中)「二」垂示代語」と題され、上堂や示衆における代語を収録したもの、(巻中)「三」勘辨一百六十五則」と題され、「因齋次、拈起蒸餅云」、「因僧随師出三門、師問」といったような日常一断面において、雲門が会下に示した代語を収録したもの(巻下)、といった三つの形態に分類され、このうち「一」が無着道忠の分類でいう「代語B」であり、「二」と「三」が「代語A」

に当たる。以下にこの三つの形態を例示したい。

「一」 挙南泉示衆云。昨夜三更。文殊普賢相打。各與二十棒。貶向二鐵圍山。趙州出衆云。和尚棒教誰喫。泉云。王老師有什麼過。州便禮拜。師代云。深領和尚慈悲。某甲歸衣鉢下。得箇安樂

挙崇壽見僧做餠餅次。隔窓問云。爾還見我麼。僧云不見。壽云。還我餠錢來。無語。師代云。和尚禮拜餠錢好

(大正、四六、五六〇下)

「二」 垂示代語

師因不安云。打草鞋行脚去。無對。師云。汝問我。與汝道。僧便問。和尚什麼處去。師云。四維上下對機設教去。代前語云。和尚宜喫薑湯

上堂云。刮久雨不晴。代云。一箭兩梁。或云。遇賤即貴。遇明即暗。代云。一起一倒。一日云咬齒一句作麼生道。代云合。或云。初秋夏借責情三十棒。代云某甲如是。問僧。新羅國與是別。代云。僧堂佛殿厨庫三門 (五六一、下)

上堂云。教意提不起。過在什麼處。代云。爲爾蝦蟇活

「三」 師因齋次。拈起蒸餅云。我這箇祇供養向北人。是爾諸人總不得。時有僧問。某甲爲什麼不得。師云。鈍置殺人。代云。某甲猶可。代前語云。兩彩一賽。問僧。古人道。直須一句下悟去。作麼生。僧云。直須一句下悟去。師去。爾爲什麼鼻孔裏祇對我。僧云。某甲什麼處是鼻孔裏祇對。師云夢見。代云。某甲慎初。和尚護末。又云南柯。又云少喫。又云。戒文一切

總不犯。師問侍者。客來將什麼接。待者無對。代云。和尚要拄杖卽道。因歲日在堂中點茶。師問僧。設羅漢齋得生天福。爾得飯喫。無對。師云。爾問我。與爾道。僧便問。爲什麼道。師云。先來不著便。如今著屎潑。代前語云。非唯施主。某甲也蒙。因聞鼓聲問僧。打鼓爲什麼人。無語。師云。爾問我。僧便問。師云。打鼓爲三軍不爲爾。代云。柴不辨師坐次。(五七一下)

『雲門錄』ではこうした代語の形式をもった用例が、「二」一一〇例、「三」三〇二例、「三」一四二例、といったように、実におびただしい数を数えるのであり、このような代語を通じた門庭接得が雲門の一つのスタイルであったといつてよからう。

ただ雲門を以て代語という表現形式を用いた嚆矢とするのは、必ずしも適切ではない。というのも唐代の雲門以前の禅僧の語録を繙くと、次のような明確な形での代語の用例が散見されるからである。

〔A〕『瀉山靈祐語録』

①有僧參衛國。問何方來。僧云。河南來。衛國云。黄河清也未。僧無對。師代云。小小狐兒。要過但過。用疑作甚麼

(大正四七、五八一一下)

②上林參師。師云。大德作甚麼來。上林云。介胄全具。師云。盡卸了來。與大德相見。上林云。卸了也。師咄云。賊尚未打。卸作甚麼。上林無對。仰山代云。請和尚屏却左右。師以手揖云。喏喏。上林。後參永泰。方論其旨

(五八〇下)

〔B〕『洞山錄』

①師勸僧曰。心法雙忘性卽眞。第幾座。僧云。第二座。師曰。因什麼不與他一座。無對。有一人代云。非心非法。師曰。心法雙忘。卽是非法。何更是道。無對。師自代曰。眞不得座云。示衆曰。知有底人解入地獄。不知有底人門外走過。師問新羅僧。未過海時在什麼處。無對。自代曰。祇今過海。也在什麼處(五一七中)

②師問僧。三人同行。一人解語。一人不解語。那箇一人是什麼。對云。此豈不是辨得主客也。師曰是也。云如何是客。師曰。語與不語俱是客。又曰。如人解弄珠。不触手不落地。卽今往來底喚作什麼卽得。無對。師自代曰。不得不得 (五一八中)

③師看上座來禮拜師曰。來作什麼。云不爲和尚來。師曰。若禮尊者某甲則偏坐

愼微長老手把拄杖。一僧指云。這個拄杖出何處。微云。雪地出。

師不肯。自代曰。如今出也有人辨得麼

(五一八中)

④師舉。葉山問僧。甚處來。云湖南來。山曰。洞庭湖水滿也未。云未。山曰。許多時雨水爲甚麼未滿。僧無語。師代曰。甚麼劫中曾增減來。道吾代云滿也。雲巖云。湛湛地 (五一二上)

⑤举文殊大士與無著喫茶次。乃拈起玻璃盞問無著。南方還有這箇否。著云無。文殊曰。尋常將甚麼喫茶著無對。師代展手曰。有無且置。借取這箇看得否。举。盤山上堂。夫心月孤圓。光吞萬象。光非照境。境亦非存。光境俱亡。復是何物。師曰。光境未亡。復是何物。⑥舉。鄧隱峯在石頭。頭剃草次。峯在頭左側。叉手而立。頭飛剃子向峯前。剃一株草。峯云。和尚祇剃得這個。不剃得那箇。頭提起剃子。峯接得便作剃草勢。頭曰。汝祇剃得那個。不解剃得這個。

峯無對。師代曰。還有堆阜麼

(五一二中)

⑦南泉問神山。作什麼。對云打羅。泉曰。手打腳打。神山云。請和尚道。泉曰。分明記取舉似作家。師別曰。無脚手者始解打羅

(五一二下)

⑧院主遊石室回。雲巖問曰。汝去到石室裏許。爲甚麼便回。主無語。

師代曰。彼中已有人占了也。巖曰。汝更去作麼。師曰。不可人情斷絕去也(五〇八上)

⑨師到參魯祖實雲禪師。禮拜侍立。少頃而出。却再入來。祖曰。祇恁麼祇恁麼。所以如此。師曰。大有人不肯。祖曰。作麼取汝口辨。師便禮拜。乃侍奉數月。僧問魯祖。如何是不言言。祖曰。汝口在甚麼喫飯。僧無對。師代曰。他不飢。喫甚麼飯(五〇八中)

*尚、『曹山錄』にも用例が見い出せるが、省略する。

このように瀉山靈祐(七七一一八五三)、洞山良价(八〇七一八六九)、曹山本寂(八四〇一九〇二)といった唐代禪僧たちの語録に已に代語形態の端緒を見いだすことができるのであり、雲門はこうした代語という独特の宗旨表詮形式を積極的に活用し、定式化させていったといえるであろう。

また無着道忠のいう「宗門ノ代別」とは、虚堂の「代別」に代表される語録の一形式を念頭に置かれていられると思われるが、「代別」の起源として考えるならば、無着道忠のいう雲門ではなく、同時代でも雲門より少し後の法眼文益(八八五―九五八)であろう。以下に示すように、法眼はその語録において、いわゆる代語と別語を明確に区別して用いている。

①舉南泉問維那今日普請作甚麼對云。拽磨。南泉云。磨從爾拽不得

動著磨中心樹子。維那無語。師代云。恁麼即不拽也(五九三上)

②舉監官一日謂衆云。虚空爲鼓。須彌爲椎。甚麼人打得。衆無對。

有僧拳似南泉。南泉云。王老師。不打這破鼓。師別云。王老師不打(五九三上)

③舉監官堅起拂子。問講華嚴僧。這箇是第幾種法界。座主沈吟。監官云。思而知慮而解。是鬼案活計。日下孤燈。果然失照。師代。

拊掌三下(五九三上)

④舉有新到。謂趙州云。某甲從長安來。橫擔一條拄杖。不曾撥著一人。趙州云。自是大德拄杖短。僧無對。師代云。呵呵(五九三上)

⑤東西山禮祖師來。夾山云。祖師不在東西山。僧無語。師代云。和尚識祖師(五九三中)

⑥白馬曇照禪師。常云。快活快活。及臨終時。叫苦苦。又云。閻羅王來取我也。院主問云。和尚當時被節度使拋向水中。神色不動。如今何得恁地。照拳枕头子云。汝道。當時是。如今是。院主無對。

師代云。此時但掩耳出去(五九三中)

⑦江南相憑廷已。與數僧遊鍾山。至一人泉。問。一人泉。許多人爭得足。一僧對云。不教欠少。誰人次少。師別云。誰是不足者(五九三下)

このように『法眼錄』における代語と別語は、宋代以降の「代」「別」の用例、もしくは無着の示した定義に合致するものである。

また管見によるかぎり『雲門錄』には、別語は見い出せない。ただし『雲門錄』には、一例ではあるが、次のような別語ともとれる古則

拈提の箇所がみられる。

舉湖南報慈垂語云。我有一句子。遍大地。僧便問。如何是遍大地底句。慈云。無空缺。師云。不合與麼道。別云。何不庵外問（五六〇下）

しかしこれは後に定形化される古則拈提における古人の語に別した語ではなく、先に古則に対する自らの下語に、さらに別して語をなしたものであり、無着道忠が示したいわけの「別語」の用例とはいえないであろう。

またこの『雲門録』では、十数例を数えるにとどまるが、「代前語云」「代後語云」「代初語云」という形態をみるのであり、この場合は無着道忠の代語の二類型とは異なるものであることは明らかであろう。

以上のことから筆者は、『雲門録』における代語は、その形式が限定され、ジャンル化されていく以前の多様性をもったものであることを知るものであり、雲門にはいわゆる「代別」の明確な意識はなかったといえよう。

宋代に入ると、雲門下で、その頌古によって名高い雪竇重顕（九八〇—一〇五二）の『明覺禪師語錄』巻四に収められる「瀑泉集」に、上堂や晩参における代語（『雲門録』の「垂示代語」に当たる）、平生折に触れて述べた代語（『雲門録』の「勘辨」に当たる）や、古則における古人の語に対する別語がまとまって収録されている。この「瀑泉集」に対する門人圓應の序には、

師自兩處道場。多廳機語句。門人集之。離三已行於世。斯所紀者。乃垂帶自答。及古今因緣。朝暮提唱。辭意曠嶮。而學黨未喻。復

致之請益。師蓋不獲已。隨所疑問。以此以彼。乍放乍收。或抑或揚。或代或別。近百五十則。實一時之能事也。況圓應忝預參承。

寧忘摺拾。然多聞未益。誠有愧於宗師。必記諸善言。諒無譏於弟子。可命曰瀑泉集。意以飛流無盡爲義。凡知我者幸同味焉。時天

聖八年八月十五日。圓應序

（大正、四七、六九二中）

とあるように、「代」「別」の語が確認され、雪竇が朝暮の提唱や室中の請益において、これを用いていたことが知られる。

そして諸々の語録の中で、早くから頌古とともに「代別」なるジャンルとして明示されているのが、臨濟下の汾陽善昭（九四七—一〇二四）の語録（一一〇一年跋刊）で、その巻中は「汾陽無德禪師頌古代別」と表題されている。この巻は、古則に対する汾陽の頌古百則が示された後、約百の問話に対する代語が示され（次の資料①）、最後にやはり百の古則を挙し、これに対する代語と別語（次の資料②）が記されている。（この巻の「代別」は禪門における公案集の最初という評価もある。『禪学大辞典』『汾陽無德禪師語録』の項）

① 詰問一百則逐一代之于後

問實華座上。獨有慈尊。萬聖俱攢。千光透影。明明普照。各各凝然。盡已神通。穿雲渡水。爲什麼識不得。如今還有識得底麼。有即道來。代云。却勞心力

風無形象。爲什麼。水輪持上。代云。力不虧

水無筋骨。爲什麼。能持大地。代云。柔弱勝剛強

地無偏黨。爲什麼。高下不平。代云。顯然水在木中爲什麼。不

燒本體。代云。壞不得空無邊際。爲什麼。世界同。代云。不添

滅佛身無。爲什麼。雙林入滅。代云示

如來至聖。爲什麼。不到曠野林中。代云明

如來至聖。爲什麼。却到曠野林中。代云知 (六一三下)

②外道六師告波斯匿王。萍沙王及十六大國王。一切人天。悉集俱

薩羅國。索世尊闢神通。富蘭那迦葉云。瞿曇現一。我等現二。

乃至百千各各一倍。佛從十二月十五日。對天人國王一切龍神。

現無量神通。至正月十五日。度無數人天。彼外道等。一無所現。

被諸國王問云。六師何不現神通。外道等悉皆無語。四散馳走。

直至死者。正與麼時。對佛現得什麼神通。代云。專甲謹退

提婆達多。教惡生王。殺父殺母。及殺世尊。失却神通。却來見

佛。佛告曰。癡人。汝何不現神通。無對慚恥。代云。君子惡先

言

佛陀波利遊臺。到忻州東。見一老人問。師向什麼處去。對云。

臺山禮拜文殊去。老人云。大德。見文殊還識也無。無對。代云。

今日慶幸

佛弟子畢陵伽婆蹉。見一僧塔。觀知是凡夫恐遭天人禮。到彼垢

却。被六群尼來打。一無言對。代云。好心無好報

(六一五下—六一六上)

このうち①の代語は雲門録の垂示代語を類型とするものであり、②

の古則に対する代別を示したものは形態を異にするが、このような

二つの代語の形態は無着道忠のいう代語の二類型に他ならない。

ところで汾陽のこの「頌古代別」の巻では前出②の代別百則の冒頭

に次のような一文があり、代別の規程に關説している。

詰問一百則。從頭道理全。古今如目觀。有口不能詮。室中請益。

古人公案。未盡善者。請以代之。語不格者。請以別之故。目之爲

代別 (大正、四七、六一五下)

ここで代別が室中の請益においても用いられていることを知ること

ができる。已にみてきたように『雲門録』では、上堂・示衆における

代語（「垂示代語」）や平生の問答における雲門の代語（「勘辨」）であ

ったのであるが、この汾陽において、代語が室中における学人接待に

用いられていることは、後の中世洞門の代語禪の密参的な性格の萌芽

が已に宋代にみられるものとして興味深いものである。

また代別の区別についても、語を尽くすことのできない者（未盡善

者）に対する代語と、語の適わざる者（語不格者）に対する別語、と

いったように規定していることがここに知られるのである。

さらに仏眼清遠（一〇六七—一一二〇）の『仏眼録』には「垂代」

なる項があり、そこには雲門の「垂示代語」の形式をふまえた代語が

収録されている。

垂代

師一日問侍者三人中那箇不在数代云和尚問不著又云某甲祇得緘口又

云慙愧且得和尚委悉因病臂示衆云我一隻左臂因你諸人教我動不得

因你諸人教我受無限辛苦代云和尚要如此分作麼又云不敢辜負和尚

一隻左臂又云學人聞得不安不樂又云此是和尚成褫某甲祇恐某甲不

到者田地舉古人云飛猿嶺峻你好看問僧你如何代云怎麼則不去也又

云爲什麼不去代云祇者便是飛猿嶺問大庾嶺頭提不起時如何代云

你却會得好又云你適來披袈裟來麼據款結案又云依樣畫葫蘆聞書閣

門開云。無風自動。好與三十棒。

『古尊宿語錄』卷三四、三〇〇c—三〇一d(『続藏』一一八卷所収)

さて、こうした伝統をふまえ成立したのが、いわゆる「虚堂の代別」である。すなわち大応国師の師として知られ、日本中世の禅林にも影響を与えた虚堂智愚(一一八五—一二六九)の、『虚堂録』卷六の「代別一百則」は、頌古とともに古則に対する拈提の手段として確立したのであり、今日に至る白隠下の公案禅においても依用されるものである。

代別

舉。世尊一日。見文殊在門外立。乃云。文殊文殊何不入門來。文殊云。我不見一法在門外。何以教我入門。

代云。啓予者多

舉。世尊因。外道問。昨日說何法。云。說定法。又問。今日說何法。云。說不定法。外道云。昨日說定。今日何說不定。世尊云。昨日定。今日不定。

代外道。相顧而去

舉。世尊臨入涅槃。文殊請再轉法輪。世尊咄云。吾四十九年住世。未曾說一字。汝請再轉法輪。是吾曾轉法輪耶。

代文殊云。世尊末後殷勤

舉。梁武帝請傳大士講經。士纔陞座。以尺拊案一下。便下座。帝愕然。誌公乃問。陛下還會麼。帝云。不會。誌公云。大士講經竟。代武帝云。實爲罕聞。

舉。忠國師因。肅宗皇帝問。師在曹溪得何法。師云。陛下還見空

中一片雲麼。帝云。見。師云。丁釘著懸挂著(大正、四七、一〇二四中)

尚、燈史では已に石川力山氏が指摘するように、『景德伝燈録』(一〇〇四年成立)の卷二七に「諸方雜拳徵拈代別語」として、古則に對

する代語、別語が収録されており、已に宋代初期にこのような代別が古則の拈提の一樣式として認められていたことも注意すべきであろう。

有道流在佛殿前背坐。僧曰。道士莫背佛。道流曰。大德本教中道。佛身充滿於法界。向什麼處坐得。僧無對。法眼代云。識得汝。

禅月詩云。禅客相逢只彈指。此心能有幾人知。大隨和尚舉問禅月。如何是此心。無對。歸宗案代云。能有人知。

台州六通院僧欲渡船。有人問。既是六通爲什麼假船。無對。天台國師代云。不飲驚衆。聖僧像被屋漏滴。有人問。既是聖僧爲什麼有漏。天台國師代云。無漏不是聖僧。(大正五

一、四三五中)

以上の如く中国禅林における代語もしくは別語なる宗旨の表現形態についてまとめてきたのであるが、思うに、これはあくまで表現形式の問題である。禅の語録では、しばしば師家が衆に問いかけ、無對のとき、「師云」として語を下しているが、この場合、「代云」「別云」といった明確な代語形式をとらなくとも、実質的には代語的・別語的な宗旨表證であるといえるだろう。また師家が古則を拈し、その主旨を「畢竟如何」と問い、「良久云」として語を下す場合も禅語録のよく用いる形であるが、こうした形態も広い意味では代語といえるであろう。このように禅宗における代語という宗旨表證の手段を考える場合、これを形式としてとらえる場合と内容的にとらえる場合とは、そ

の範囲も異なってくることに、無論留意しなければならないであろうが、本稿では中世洞門のいわゆる「代語」文献の考察を主眼にするので、とりあえず代語という形式をもった文献に限定して考察してみた。

さて『禅林象器箋』における「代語」の項を出発点に、中国禅林における代語の起源と歴史について管見したのであるが、最後に同じ江戸期の洞門の面山瑞方もその『洞上僧堂清規考訂別録』巻六の「告香普説 附垂示考訂」において、垂示代語について説明し、『雲門録』、『仏眼録』、『虚堂録』に言及しているので以下に示しておきたい。

今時ノ叢林ニ、節日ノ早朝垂示の式トイフアリ、前夜ヨリ座位ヲ排シ、早晨禮賀ノ以前ニ、師家舉話スレバ、大衆歩ヲ進テ下語、師家拶語ナドアリテ、結語シテ、大衆普同三拜ス、コレ古規ノ早參ナリ、ソノ式ノ弊セルガ、洞下ニ代語ヲ出スト云ニ變ゼリ、モト垂示ハ、問話ナキニ師家ヨリ示衆スルタイフ、垂示示衆垂語ナド云モ同ジ、ユヘニ垂示トハ、師家バカリノ言句ニカギル、碧巖從容等ノ如シ、佛眼録ニ、室中垂示ト云フ一章ハ、垂語バカリヲ録セリ、マタ垂示代語ト云ハ、コノ垂示下ニテ大衆下語ヲ請ヒ、下語了テ自ラ衆ニ代テ下語ス。雲門録中ニ、垂示代語ト云一章アリ、録シテ云ク、上堂云、割、久雨不晴、代云、一箭兩垛、コレ割久雨不晴ハ垂示ニテ、一箭兩垛ハ代語ナリ、マタ示衆云、看看佛殿入僧堂裏去也、代云、羅浮打鼓韶州舞、コレモ看看ノ下ハ垂示ニテ、羅浮ノ下ハ代語ナリ、マタ垂代トモ云フ、佛眼録ニ、垂代ノ一章アリテ、垂示ト代語トヲ録セリ、虚堂録中ニ、代別ノ一章アリ、古則ヲ舉シテ、下ニ代云ト見ヘ、マタ古則ヲ舉シテ、

下ニ別云ト見ヘタリ、上ノゴトクレナバ、問話ナキニ師家ヨリ垂語スルハ、ミナ垂示ナレバ、上堂小參、法堂室中、處ヲエラバズ、時ヲエラバザルナリ、（『曹全』清規 二七九—二八〇頁）

三、道元禪師における代語について

日本禅林語録における代語の系譜を考えるにあたり、まず道元禪師の著作について検討していきたい。已に石川力山氏は前掲の論文の中で、『正法眼蔵』の著語的性格」という項目を設け、『正法眼蔵』における代語的拈提について具体的な用例を挙げ、次のようにのべておられる。³⁾

「仏性」の巻の最後も、

さらに仏性を道取するには、沍泥滞水なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。向上に道取するとき、作麼生ならんかこれ仏。還委悉麼。三頭八臂。（同右、三十四頁）

と結んでいるが、「還委悉麼」と問いかけ、「三頭八臂」と自ら答えているのも、明らかに自問自答の代語の形式に外ならない。またやはり黄檗と南泉の間答に関して、

南泉いはく、漿水錢且致、草鞋錢教恁麼人還。いはゆる、こんずのあたひはしばらくおく、草鞋のあたひはたれをしてかへさしめんとなり。この道取の意旨、ひさしく生々をつくして参究すべし。漿水錢いかなればしばらく不管になる。留心勤学すべし。草鞋錢なにか管得する。行脚の年月に、

いくばくの草鞋をか踏破したるなり。いまいふべし、若
不_レ還_レ錢、未_レ著_二草鞋_一。またいふべし、兩_三三轡_一。この道得な
るべし、この宗旨なるべし。(同右、三十頁)

という時の「若不_レ還_レ錢、未_レ著_二草鞋_一」「兩_三三轡_一」という語は、
黄檗に代つてなされた「代語」でもある。

このように『正法眼藏』の古則拈提の用例の中に、実質的な代語と
しての文脈構造をみる事ができるといえるが、これはそもそも中
国禪宗の語録の有する代語的もしくは著語的性格が、和文の語録とし
ての『正法眼藏』に反映していることを意味するものである。

また漢文の語録としての『永平広録』には、いわゆる代語の形式を
もつ明確な用例はみることができないが、上堂語の中に次のような用
例を見出すことができる。

- ① 晚間上堂云、昔唐虞有_二犯_レ法者_一、只畫_二其衣服_一而已。雖_モ然_ニ無_シ人
犯_レ法。後來雖_モ行_二五刑之辛_一法、屢多_二犯_レ法之人_一。唐虞之畫_二衣_一、無_シ
人犯_レ法、所_ニ以_一重_レ道重_レ法也。今我黨幸値_二於_一不_レ可_レ比_二唐虞_一
之佛法、設使不_レ畫_二衣服_一、豈犯_二佛法_一者哉。如有_二犯_レ者_一、乃不_レ重_二
佛法_一也。苦哉、佛陀耶。記得、南泉問_二黃檗_一、甚處去。檗云、擇菜
去。泉云、將_二甚麼_一擇。檗豎_二起_一刀子。泉云、只解_二作客_一、不_レ解_二作
主_一。南泉・黃檗、作家相見雖_モ是_二甚麼_一、若是大佛、別有_二商量_一。當_レ黃
檗_ニ起_二刀子_一時、上代_二南泉_一道、我王庫内無如是刀。
② 上堂舉、五祖到_二盧行者碓米坊_一云、米白也未。行者云、白也、未
有飾。祖、以_レ杖擊_レ白_三三下_一。行者以_二箕米_一三簸而入室。師云、

若是永平 又且不_レ然。五祖若問_二永平_一、米白也未。

この「我王庫内無如是刀」なる語は、無着道忠が示した分類の中の
「代語B」、すなわち古人に代つてなす代語である。しかしながら『永
平広録』では、こうした代語形式に近い表現はわずかであり、全体と
してみるならば、例外的であろう。

四、代語と語録抄について

さて次に本稿の中心テーマである中世曹洞宗における代語の問題に
ついて以下に考察したい。

室町期以降の洞門はその参学において次第に公案参得による比重が
強くなつてくるのであるが、こうした傾向は公案禅として位置づけら
れ、道元禅師の宗風がとだえた暗黒時代として評価されてきたところ
である。前述の如くこうした中世曹洞宗史研究も近年になつてかなり
進展を遂げてはいるものの、やはり抄物の文献量も多く、いまだに多
くの課題を残しているといえるであろう。

已に冒頭で述べたように、洞門抄物の一分野として、「代語」という
一群の文献が占めていることが、臨済系の抄物文献と比較して特徴的
であるといえるのであるが、この場合の「代語」とは、各和尚の代語
を収録した典籍、つまり代語集であり、実質的には洞門僧の語録であ
る。(前出の『禅学大辞典』に見た第三の意味、すなわち「禅宗語録の
一形式」として解されるものである。)

しかしながら洞門抄物における代語という表詮形態は、こうした代

語集に限定されるのではない。前出の石川力山氏の分類に見る、語録抄、門参、切紙といった分野においても重要な表現手段として依用されていることが知られるのである。

【語録抄】

○世尊登座拈花示衆人天百万億皆罔措 破云當時人天百万ノミニアラス今日モ亦罔措 代云長安花下路迷却幾多人 ○独有金色頭陀 破顔微笑 代云元来笑裏有刀○世尊云吾有正法眼藏涅槃妙心実相無相分付摩訶大迦葉 師云何ト分与シタソ 代云二十四番花信風 ○此経多談帝王事所以秘藏世無聞者 代云王令稍嚴 ○佛惠泉嘆痔其博窮師云嗚呼物多知タ人カナ 拶云正法眼与涅槃心相去多少代云不見桃花見李花 『人天眼目抄』（東大史料編纂所藏勉誠社版 五五四—五五五頁）

【門参】

天上天下唯我独尊 代清波——異也 心ハ 不点一色也 爰ヲ誕生一色トモ云也 意自異也ト云ワ ソコニカシコノ響キガアルゾ 師云雲門ノ棒ノ行ジ用ヲ 代拳ヲ握テ腰ニ収テ齒ヲ咬ム也 師云句ヲ窟棒元来劈面打ダ不ズ 心ハ打ヌ棒ヲ屈ツ棒ト云也用ノ棒也 末代ニ至テ如是齒ヲ咬ムガ 仏思ヲ報ジ用也 此ノ心ヲ以テ 着語ヲスベシ ○□履西皈ヲ 代徳山ノ打タ棒モ 俱抵ノ一指ヲ立テタモ 達磨ノ履跡トデ走ゾ 酬對ノ句モヨシ 西来西皈ハ皆ナシワ面ヲタゾトミル事モ在郎ズ 爰デハ活祖ヲミタ活祖ト云ワ 去来ニアヅカラヌゾ 同ク活祖相見ト出ス時キハ一堂風冷——明 此ノ心モヨシ 亦蹤跡ト出ス時キハ 其ノ心ヲ以

テスベシドレモ其ノトキノ指合ニノルベシ⁽⁶⁾

【切紙】

同八堂贊

○師云、大極已前無此話云タカ、何トテ方丈テハ在ルゾ、代、此話無イ処カ主人ノスミカタ走、句ヲ、 代云、妙無妙、玄無玄、師云、仏殿ヲ、立身又手而抽身、師云、其カ何トテ仏殿テワ在ルゾ、師久ノ云、マツ爰ガ好ケ仏殿デ走、師云、何トテ現来ハ在ソ、代、空仏ト見レバ現来ニワ落チ起ヌゾ、云、如是仏ヲ、代云、大通智勝ノ道場、師云、庫裡ヲ、代云、ロニシイ味ヲツクルガ庫裡テ走、師云、其レカ何ントテ庫裡テワル、代云、飯裡在レ砂、拶云、時如何、 代、饑来喫レ飯、困来打眠、師云、僧堂ヲ、代、良久ス、云、其レカ何トテ僧堂テワ在ルゾ、代、空々寂々デ走、師云、此何辺事ヲカナシ得タル、代云、仏祖刹斷ソ走、云、其句ヲ、 代云、常磨吹毛劒、師云、風呂ヲ、代云、心地ヲキヨムルガ風呂デ走、云、キヨメ羊ヲ、代云、一千七百則ヲ心地ヲキヨムルガ風呂デ走、云、キヨメ羊ヲ、代云、一千七百則ヲハライ尽ス処テ走、清底ヲ、 代、挿身ス、云、恁麼時如何、 代云、何共申セバ塵テ走、師云、現来ハ「」ヲ、 代、乗レ興来興尽、皈ル、師云、淨頭デワ在ルゾ、 代云、下タハ「」ヨコレ路走、ハ「」代、彈指而卓々、云□□時如何、代、抽身ス、師云、山門ヲ、代云、莊嚴スルカ山門デ走、云、其ハ何トテサカンナルヤ、真面デ走、云、何ントテ実面ハアラワシ走ヌ、云、畢竟是如何、 代

云、卓々不依物、冥々何縁、云、証拠ヲ、代云、午頭尾ト一、按
山是也、大陽機^ヲ惜^シ師云、如何是此ノ人、代云、此人終不^レ涉思
惟^一七堂參了、正盛十州派^一在是、三派共^一一大事伝之^一、

このように中世洞門においては、こうした様々のジャンルの典籍に
代語的表詮が見い出されるのであり、まさにこの時代を代語禪と評価
する所以なのであろう。

したがって中世曹洞宗における代語という問題を考察する場合、代
語集のジャンルを超え、こうした洞門抄物の各分野をも射程に入れる
べきであろうが、これは筆者の力に余るところであるので、本稿では
このうち語録抄と代語集について検討していきたい。

そこでまず中世洞門における語録抄と代語集の文献のリストを次の
十三頁に示そう。

左に出した文献は洞門抄物の代語、語録抄を網羅するものではなく、
また特に語録抄の場合、一つの抄の中に他の抄が引用されて重層的に
成立している場合もあり、上記の表によってその全体像を云々するこ
とは誠に危険であることは筆者も当然覚悟しているが、しかし現時点
では一々の文献について詳細に検討する余裕もないので、あくまで試
論として次のような点を提起し、詳細な検討は別の機会をまちたい。

そこでまず左記の表の中、語録抄について気がつくことは、峨山の
注解といわれる『自得語録抄』(巻五のみ)、月江の『無門関代語』東
国語最古の資料として注目されてきた川僧慧洛の『人天眼目抄』や大
空玄虎の『碧巖大空抄』といった洞門抄物でも比較的古い成立の語録
抄には、語録の拈提において語意に関する注解だけではなく、その公

案の主旨を確認する摺語、代語といった形が要となつて拈提されてい
る、という点である。つまりこれらは各文脈や各本則を端的に把握さ
せるために代語をもって決訳しており、このような語録抄的性格と代
語的性格を兼ね備えた、いわば「語録代」・「語録代語」ともいえるよ
うな文献である。こうした傾向は雷澤の『碧巖録抄』や才翁の『碧巖
代語』といったあたりまで受け継がれているが、そもそもこのような
スタイルはその拈提における各本則の結句としての下語を定型化(代
語の形態を有す)させた『伝光録』に遡るものといえよう。

こうした室町中期の語録抄の多くが、その拈提にあたって代語的特
徴を色濃く残しているのに対し、万安抄に代表されるような中世末か
ら江戸初期にかけての語録抄は代語的形態はほとんど見られないとい
うことも注意されるべきであらう。一方この中世末以降の洞門におい
ては、語録としての代語集が集中的に撰述されており、これを代語集
と語録抄を形態史的な観点から概観するならば、代語と語録抄の形式
的分化、つまり代語的宗旨の表詮はもっぱら代語集により、語録抄は
あくまで文意の理解を図るための語釈を中心とした拈提として分離化
がなされているといえるであらう。

無論こうした傾向はあくまで概観であつて、比較的古い時代の語録
抄の中でも、徹通義介の撰と伝えられる『劫外録抄』をはじめこれに
合致しない(代語を含まない)典籍も見い出せる。こうした抄は語録
の語義解釈・内容把握を目的として撰述された典籍として見ることで
でき、乗示(上堂・小参等)において下語・代語を大衆に示すことを
前提とした抄とはその性格が異なるものであるといえるであらう。

【表】

代語集(またはこれに類する典籍)		語録抄
壁山紹韶(1268-1325)『伝光録』		
峨山韶碩(1276-1366)『自得語録抄』佐賀円心寺所蔵(巻五は代語による拈提あり)		大智(1290-1366)『天童小参抄』
了庵慧明(1337-1411)『大雄山最乗禅寺御開山御代』最乗寺蔵		
竹居正猷(石 1380-1461)『幻寄集』丈六寺蔵		
南英謙宗(1387-1460)『南英謙宗語録』種月寺蔵	月江正文(-1461)『無門関代語』(『禅宗無門関古今全抄』に所収)西光寺蔵	
	川僧慧濟(太 1409-1475)『人天眼目抄』	南英『碧巖鈔』(外題『碧巖事考』)慈光寺蔵
松庵宗栄(了 乗国寺開山1423-1504)『見龍山乗国開山松庵栄大和尚語録』		『碧巖録抄』
金岡用兼(石 1438-1515)『金岡兼大和尚御代』丈六寺蔵	大空玄虎(太 1438-1505)『碧巖大空抄』(浄牧院本一五〇一年写、浄眼寺本一五〇三年写)	
	一華文英、菊隠瑞潭(了)『永昌院』開山大和尚下語二代代語』(『碧巖録』の代語 一五一九年写)	
了然永超(了 円心寺開山1471-1551)『円心寺中興了然大和尚法語』	雷沢宗俊(天)『碧巖録抄』一五二三年講述 西福寺蔵	
竜州文海(了 1480-1550)大中寺四世『竜州代』	『碧巖集抄』(一五四八年写) 駒沢大学所蔵	
貫之梵鶴(天 1505-1590)『貫之梵鶴和尚代語抄』瑞岩寺蔵	『無門関抄』(一五五五年写 吉川泰雄氏蔵)	
	貫之『劫外録抄』岸沢文庫蔵	
	貫之『無門関鎖解』駒澤大学所蔵	
	貫之『碧巖録抄』瑞岩寺蔵	
	才心総藝(天 1506-1569)『碧巖代語』長興寺蔵	
	『無門関抄』松ヶ丘文庫所蔵	
天嶺吞甫(了 大中寺七世 1516-1588)『天嶺代』		
巨海良達(了 総寧寺一三三三 ？-1599)『巨海代』	『無門関抄』(一六二二刊 積翠文庫等所蔵)	
万極良寿(了 総寧寺一四四四 ？-1607)『万極代』	勝国『碧巖鈔』(寛永九より九年間の講述)	
勝国良尊(了 総寧寺一八 -1640)『勝国代』	『無門関春夕抄』(一六二四刊)	
不鐵桂文(石 高伝寺七世 1563-1636)『不鐵代』西光寺蔵	『臨濟録抄』(万安抄)	
大淵文利(了 総寧寺一九世 ？-1636)『大淵代』	『四部録抄』(万安抄)	
天南松薫(了 大中寺十三世 ？-1640)『天南代』	『無門関抄』(万安抄)	
高國英峻(了 総寧寺一一世 永平寺一十七世 ？-1674)『高國代』	『碧巖集抄』(万安抄)	
光紹智堂(了 総寧寺一一世 永平寺二十世 ？-1670)『恵輪代』	『禅林類聚撮要鈔』(万安抄)	

(*)了了庵派、石石屋派、天天真派、太太源派

五、洞門代語集の成立における『了庵代』の問題について

次に洞門抄物に特色として見られる代語集について、その成立的問題について考察したい。いったいこのような代語集が形成されたのは、いつ頃のことであろうか。前出の一覧を見る限り、『了庵代』となるであろう。まさにこのことによって、その後の了庵派における代語の隆盛が、この派祖了庵慧明に帰することを知るのであるが、筆者はここでこの了庵代の成立に対して次のような問題点を指摘したい。

それはすなわち『了庵代』というものが、はたして成立当初からこうした完全なる代語集としての形を有していたかどうか、ということである。たとえば師の通幻寂霊の『通幻寂霊禪師漫録』には、その二度の總持寺住持時代や越前龍泉寺において、折にふれ、上堂や小参として古則・話頭を挙げて衆に代って語を下している。この語は三言、四言、五言、七言の二句が主な形式であるが、これは後の一連の代語集に用いられる代句である。こうした形態は通玄の師弟実峰良秀の『実峰禪師語録』や了庵の師弟の普濟善救の『普濟禪師語録』もほとんど同様であり、さらに了庵の会下である無極慧徹の語録もやはりこうした形式を踏襲している。しかるにこの『了庵代』はこの時代の語録と比べて、基本的な部分は一致するものの、形態的な側面から見ると独り室町後期以降の代語集のような形態を示しているといえるのである。ところでいま『了庵代』を別にして、洞門代語集の成立を考える上で、筆者が注目するのは、竹居正猷の語録である『幻寄集』⁸⁾というものである。この竹居は了庵の兄弟で鹿兒島に法灯を展開した石屋真梁

の法嗣であり、了庵よりもほぼ半世紀後の人である。この『幻寄集』には、それぞれの本則に対し、「着語云」とか、「良久云」、「頌云」そして「代云」といった形で語が示されているが、後代の一定した代語集の形態はとっておらず、混合した不統一の形態である。(ただし後半の最後の部分はいわゆる代語集のような形態となっている。)

龍文開祖竹居正猷大和尚

幻寄集

①○世尊一日坐次見二人昇猪過乃問箇是甚麼云佛具一切智者猪子也不知世尊云也須問過 着語云作賊人心虚

②○玄則監院於丙丁童子来求火之悟下大悟因縁 頌曰学人間自己、丙丁童求火、昨夜起秋風、吹落空華集

③●茶礼次問衆、大衆拟集喫茶、人喫茶、々喫人 自代云、賣扇老婆手遮日

④●一日上堂大衆集定、良久曰、好肉剗瘡卓主杖下座

⑤●举僧問宏智如何是空劫以前自己、師云、白馬入芦花 代云、不隱不露

しかし同じ石屋派の語録でも、竹居よりさらに半世紀後で阿波丈六寺を開いた金岡用兼(一四三八—一五〇五)の語録になると、次のように完全な代語集の形態となっている。

○雲門齋時胡餅一咬云、咬着帝釈鼻孔、帝釈害痛、拶、雲門恁麼道意作麼生、代、灯心刺着石人足、嘉州大像忍痛叫

○雲門云、十五日以前汝不問、十五日以後一句謂將來時代云、日々は好日、拶、雲門底且置、諸人作麼生道、代、在前忽然在後

○道吾舞笏秘魔擎収、雪峯輓毯、拶、両三宿意作麼生道、代、多福
一双此一茎兩茎斜三茎四茎曲 (同書、二丁、表・裏)

尚金岡用兼の師は大寧寺六世の大庵須益(一四〇六—一四七三)であり、大庵には『大庵和尚下語』(佐賀円応寺所藏)なる典籍があるが、これは機関の注解であつて代語集ではない。⁹⁾

また東国では、了庵下で在中派の松庵宗栄(一四三三—一五〇四)が、金岡用兼とほぼ同時代に活躍した禅僧であり、下総結城の乗国寺を開いているが、その語録(『見龍山乗国開山松庵宗大和尚語録』)をみると、同様に代語集の形態となっている。¹⁰⁾

一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出、如何是經、代、同坐同行不見顔、又、王令稍嚴不許攙行奪市

大力量人因甚擡脚不起、代、脚下盡乾坤、取、過了也

乾峰云拳一不得拳二放過一著落在第二雲門出衆云昨日有一僧自天台來却?南兵去、拶、如何委悉、代、椀子落地櫟子作七片、拶、那辺不守空王殿爭耕田向日輪 (同書、一丁、表)

このように歴史的にみるならば、十四世紀末から十五世紀に入る頃になって、東国西国において、後世盛んに作成される洞門代語集が成立していることがわかるのである。

さて、こうしたことをふまえ、今一度『了庵代』について検討を加えたい。まず筆者は『了庵代』の存在自体を疑うものではない。少なくとも現存の『了庵代』の原型となる典籍は存在したと考える。なぜならば前述の無極慧徹の語録には、次のような了庵の語の引用があり、それが『了庵代』に確認されるからである。

示衆曰。深入ニ禪定。見ニ十方佛。諸方禪和錯會云。深入ニ禪定一者。打成一片工夫也。見ニ十方佛一者。最初知有也。若恁麼會。

未レ知ニ深入ニ道理。了庵先師曰。青蘿蔭蔭直到ニ寒松頂。山僧不レ然。深入ニ禪定。空王那畔絶ニ知音。見ニ十方佛。紫羅帳外月沈沈。

上堂。舉。古德曰。桃紅李白落ニ室墀。天碧地青懸ニ錦機。雲鶴出ニ籠過ニ鳥道。飽參密旨不レ傳時。了庵先師別曰。這邊景色非ニ眼目。教外別傳當ニ大機。山僧不レ然。卻將ニ錦葉黃花地。變爲ニ玄暉水墨圖。

(『曹全』語録一、二二二頁)

しかしながら大雄山最乗寺に現在残されている江戸寛永年間書写の『了庵代』の成立については、当時の語録の形態史の上からも、以上の疑問が提起されるのである。少なくとも現今の資料による限り、『了庵代』のような形態が、無極慧徹をはじめとする当時の洞門に影響を与えておらず、既述の如く、金岡や松庵の代語集の時代まで約一世紀を隔てること、竹居の『幻寄集』の例などを考え合わせると、この『了庵代』では最初からこういった完全な形の代語集ではなかったのではなからうか。つまり、江戸期に現在の形態として書写されるまでに、中世末から近世初頭に盛んに刊行された代語集のような形に整理されたものではないか、と推察するのである。なお無極慧徹の語録には上堂において「了庵先師別曰」として引用されているが、「了庵先師代曰」としてではないことも注意しておきたい。

以上『了庵代』について、検討してきたが、洞門の代語集の歴史を考える上で、重要な文献であり、今後さらに内容的な側面からの考察できれば、と思っている。

六、中世後期の代語集の形態的な問題について

さて次に中世室町後期から江戸初期にかけて撰述された代語集について、これらが共有する特質（表現形式や撰述者の問題）を考察し、またこれらが依拠する典籍が如何なるものであったのか、検討してみたい。

まずこの代語集を残しているのはほとんどが、通幻寂靈の二甘露門である了庵慧明と石屋真梁の門派に集中しているということが指摘されるであろう。（この他には太源派の代語集も豊川市西明寺所蔵の典籍中に見い出される。）このうち了庵派は関東にあつて大きな勢力を占め、江戸期には関三刹のすべてがこの派で占められるようになるが、こうした洞門宗政の中心寺院として影響力を有した和尚たちの代語が記録されて代語集として編集されている。前述の如く特に総寧寺・大中寺の歴住和尚の場合、版本として刊行されるにいたっている。

ところでこうした代語集は、「一」三朝、端午、七夕、中秋、冬夜といった一般的な年中行事、「二」仏誕生、入定、出定、涅槃会のような三仏忌、もしくは達磨忌や開山忌、先師忌といった法要、または在家の仏事、「三」夏入、送行、夜参始、夜参終、開炉、といった叢林行事、等に因んでなされた代語であり、いわゆる語録における上堂・小参の場合に準ずるものであらう。このように中世末から近世初頭ではいわゆる上堂・小参といった語録的形態が退行し、代語による拈提がもつぱらとなって語録としての役割を果たしているのである。

このような状況を面山瑞方は前出の『洞上僧堂清規考訂別録』にお

いて次のように述べている。

日本洞下ニ、早参、晩参ノ式廢シ、五参上堂ナドハ一向ニシラズ、朔望ノ上堂小参モナクナリテ、中古ヨリタダ垂示代語バカリノコリテ今ニイタル、ユヘニ今比モ、師家ノ古則を挙シテ、衆ノ下語了テ、末ニ自ラ下語スルヲ、關東ニテハ代語ト云フ、ソノ師家ヲ俚諺ニ、代語房主ト云ユヘニ、規矩ヲ行フ寺デハ、代語ト云タイヤガリテ、垂示ト云ナリ、スレドモ、コノ垂示ハ早参、晩参、上堂、小参、ソノ時時ニ順ジテヨシ、今時格別ニ式ヲ定ムルハ誤ナリ、

（『曹全』清規、二八〇頁）

このわずかな文脈からも面山の中世的な代語禪に対する低い評価を伺い知ることができよう。

ところでこうした代語集の形式は、まず本則を挙し、「○○意旨如何」「○○作麼生」「畢竟如何」といったような摺語が示され、これに対し師家の境涯の表詮である代語が開示される、といった形をとっている。この代語の形態は様々であるが、もつとも多く用いられる形は七言（もしくは五言）の二句からなる半偈であらう。しかるに中国の語録における代語の形態は、『雲門録』・『汾陽録』・『虚堂録』などを見る限り、わずかな例外はあるが一貫して一句である。この点が、元来の中国禅林における代別と中世洞門代語集における代語との顕著な異同ではなからうか。

またこの洞門抄物における代語は、いわゆる無着道忠が示した代語の二類型に当てはめるならば、現前の大衆の無對なることによつて、代語する、という点では、前述の「代語A」に当たるとあらう。しか

しながら中国の語録では古則を拈提して代語する場合は、『雲門録』をはじめ、『虚堂録』に至るまで、もっぱら古則の中の問答について、古人に代って代語する「代語B」であり、洞門代語集のような形態の代語はほとんど見ることはない。

つまり洞門抄物集の場合における代語とは、師家が古則を総括するために現前の大衆に成り代ってする代語であり、中国の禅語録にみる代語とは、厳密には同一ではない。

以上の如く、洞門抄物における代語文献は、中国禅宗における「代別」の伝統を踏まえながらも、中世洞門僧たちによって新たな宗旨の表現形式として成立せられたものであることを知るのである。

七、中世洞門代語集における引用典籍について

こうした洞門代語集を繙くと、多くの場合（特に了庵派）において、それぞれの本則の典拠、そして代語、代句の典拠が明示されている。これによって当時の洞門僧たちが如何なる典籍を依用し、参学していたのかを知ることが出来るであろう。そこで以下において八つの代語集について、その本則の出典、また代句の出典を表にまとめて示すことにしたい。

尚、この表はあくまでこれらの代語集において明記された典籍名を記したものであることを原則としている。したがって『天童録』とある場合、ほとんどが『宏智録』であるが、あえて『宏智録』と別に表記した。また収録典籍は八つの代語集の中で二回以上引用された場合はすべて記した。

〔本則の典拠〕

	竜州代	天嶺代	巨海代	万極代	大淵代	天南代	高國代	惠輪代
經典					一			一
法華経	三							
史伝								
景德伝燈録	二 二	五	一		一 一	七	三	一
續燈録	一	一			一	一		
聯燈会要		一 八		三	一			
嘉泰普燈録	九 八	四 二	二	六	二 七	六 〇	一 九	一 一
五燈会元	一 〇	六 一		四	八	一 八	一 〇	五
正法直伝	二		一			一		
禅林僧寶伝	四	一	一		五	四	三	
五家正宗賛					六		三	一
續集燈		三			一	一	一	
編年通論								
公案								
碧巖録	一 二	二 二	一		六	一 八	四	二
無門関	三	一			一	二		
大慧正法眼蔵	七	三						

洞山錄	古尊宿語錄	寶鏡三昧	証道歌	信心銘	祖錄	枯崖漫錄	羅湖野錄	林間錄	人天眼目	禪苑蒙求	大慧宗門武庫	禪林寶訓	宗義	禪門拈頌集	大光明藏	禪宗頌古聯珠集	頌古	禪林類聚
			一	八				一	二		一	三		四				二二二
							一	三	八			二		一七	一	一		二九八
								一	二		二	四		一	一			三三二
									一					二二				
三	一					三			五		一	四		一				七二
						一	一	三	五		二	四		五	二	二		二七三
二	一							一	四			四		一	一	二		四五
									一		一	一		九				一四
虎丘錄	物初錄	大川錄	大慧錄(書)	無門慧開錄	月庵善果錄	円悟心要	円悟錄	趙州錄	臨濟錄	如淨錄	自得錄	天童錄	天童小參	宏智錄	真歇錄	真歇拈古	投子錄	玄沙錄
			一四			二	一	四	九	一	三〇	二三	七	一七		二	五	三
			二			八					一〇	三		三			四	一
												三	一	四	一		二	一
一	四					二					四	七		一			一	
	三	一	三	一	一		一		二	四	八	二		五	一		二	二
	一	一	一四		四	二		一	七		一〇		二	七		一	三	
		二	三		六	五			二	八	五	七	一	二	一		一	一
					一	一				一	四	三						一

— 19 —

杜子美	二〇	一	二	一	一	一	一
珍珠囊	一	一	二	一	一	一	一
韻府	一	一	二	一	一	一	一
古文真宝	一	一	二	一	一	一	一
点鉄集	一	一	二	一	一	一	一
翰墨全書	一	一	二	一	一	一	一

〔代句の典拠〕

公案	無門関	大慧正法眼蔵	禅林類聚	續集燈	五家正宗贊	禅林僧寶伝	正法直伝	五燈会元	嘉泰普燈録	聯燈会要	續燈録	景德伝燈録	史伝	その他	法華経	經典	
一五九	五	三〇	一〇二	二	五	九	一〇七	一	一三	一	一	一	一	一	一	一	龍州代
一〇二		二九	二	三	四	一三	二八	一三	三	三	三	三	三	三	三	三	天嶺代
一六		四	一	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	巨海代
二四	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	万極代
五〇		一三	一	一	一	一	一五	一	二	六	一	一	一	一	一	一	大淵代
一九六	九	一五	一	二	二	七	六五	一	六	一	一	一	一	一	一	一	天南代
五三		一二	一	三	二	四	二九	一	三	一	一	一	一	一	一	一	高國代
一四		二	一	一	一	五	一一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	惠輪代

頌古	禪宗頌古聯珠集	禪門拈頌集	祖苑聯芳集	宗義	禪門寶訓	大慧宗門武庫	禪苑蒙求	人天眼目	林間錄	羅湖野錄	枯崖漫錄	禪千字文	祖錄	信心銘	証道歌	寶鏡三昧	古尊宿語錄	洞山錄		
	二	四	一					三九	一			二		一	一					
	五	四六	二					二三	二	一					一		一			
		三	一				一	二							一					
	四	六	二五					一		一										
		一五	五		一			五	一								一			
	四	一六			一	四		二三	二	一	一			一	一		一			
	三	七	二					四			一									
		一			一	一		一												
曹山錄	投子錄	真歇劫外錄	真歇拈古	真歇錄	宏智錄	天童小參	宏智頌古	天童錄	自得錄	如淨錄	雪竇頌古	臨濟錄	円悟錄	円悟心要	月庵善果錄	無門慧開錄	大慧錄(書)	大川錄	物初錄	虎丘錄
一	一三	一	三		二	一四	七	三一	二七	一		四		三	一		一四	一		一
	二	一			六	八		一四	五			二		二			二			
				二	一	二		六					一							
								三												一
	二			七	二	二		九	一	一		一	一	二	四	二	二	三	二	
	三			一六	六	六		四	二	一	三	六	一	四	四	一	一〇	五		
	二			五	三	二		二	六	九	六	六	六	六	五	三	二	三		
			一					三	四	一			一	一						

永平正法眼藏	柏堂錄	清拙正澄錄	寂室錄	絕海錄	大休正念錄	仏光錄	大覺錄	(日本)	因師集賢錄	平石錄	中峰錄	仏鑑錄	破庵祖先錄	了庵清欲錄	月江正印錄	橫川錄	虛堂錄	松源錄	応庵錄
		一									一	二		一	二				
		三												四			一		
									一								一		
		三	二			二													
一	一	二	七			四			三	一	五		一	八	二		二	五	二
		一	三	二		四					一	三		一	一	一		五	
	一		八	四	四	六	一			五			一	一	三		七	六	三
	一		一	一					二	一	二					一	一		
外典	空華集	貞和集	江湖風月集	錦繡段	三休詩	總集		禪儀外文集	雪峰東山外集	山谷詩集	東坡禪喜集	祖英集	寒山詩	禪文学	通幻漫錄	大智偈頌	永平行狀記	伝光錄	永平語錄
		二〇	一八		一			一四	一	三	四		一			二			
		三〇	八		二			四		二			一			三			
	一	一	二							三									
		三	七					一		三	一						一		
	一	二	五		七			七	六	三六(二)	三				一	五			二
		二四	一六		一			九	三	三						九		二	三
	三	七						三	一	二	二	一			一	二			一
	一	二						三	三	一	二	一							

以上の表によつて中世洞門僧の一般的に用いられた典籍が、こうして代語集に表れる頻度によつてある程度明らかになつたことであらう。この表によつて明確となつた点は次のような点である。

まずここに列挙した仏典・禪籍・外典は約百点にも上るが、これによつて代語集における典拠のほぼ全体を示すことができる。筆者はこうした事實は、その百点という典籍数にもかかわらず、現在に續藏に収録されている多数の禪語録、そして膨大な仏典・詩文や外典の中からの引用であることを考える限り、これらの中世後期の洞門僧たちが依用している典籍はかなり限定的ではないかと考えている。たとえば特に臨済系の禅僧の語録について見ると、宋代の月江正印・了庵清欲・虚堂智愚らの語録を中心に用いられており、また日本の臨済系の語録

— 23 —

これらの代語集は中国禅林における代語という宗旨表詮形式に準拠しながらも、語録抄における代語的拈提の過程を踏まえ、独特の表現形式となっていたことが理解されよう。またこれら代語抄の本則・代句が依用した典拠は、今日の曹洞宗乗で重視される典籍（『正法眼蔵』『從容録』など）とはかなり異なっていたことも明らかになった。

尚、本稿では中世臨濟禅の五山・林下の禅僧の語録については、ほとんどふれることがなかった。しかしこうした洞門抄物研究は曹洞禅ばかりでなく、林下の動きの中で捉えることも必要であり、今後の課題としたい。

(1) 金田弘『洞門抄物と国語研究』桜楓社が代表的成果である。

(2) 石川力山「洞門抄物の発生とその性格」『松ヶ丘文庫研究年報』第二号、八九頁。

(3) 石川力山、前掲論文、九八―九九頁。

(4) 大久保道舟編『道元禅師全集』下巻、三一頁。

(5) 同、八七頁。

(6) 『大中寺禅室内秘書』「一」六六頁。

(7) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論（五）——叢林行事關係を中心として（続）——」『駒澤大学佛教学部研究紀要』第四三号、九九―一〇〇頁。

(8) この『幻寄集』の他、丈六寺所蔵の典籍は平成三年八月石川力山氏、志部憲一氏、熊本英人氏、飯塚大展氏とともに徳島市丈六町の丈六寺にて調査・撮影した資料による。

(9) 円応寺（佐賀県武雄市）の資料については、石川力山先生より借覧させていただいた、謹んで御礼申し上げる次第である。

(10) この松庵宗栄の代語集については、茨城県結城市の乗国寺ご住職鈴木仙舟師にご高配いただいた。謹んで御礼申し上げる次第である。